

## 2022年度2・3・4年次アンケート

本学では、毎年4月のオリエンテーション時に、新2年次、新3年次、新4年次を対象とした「教育・学生生活に関するアンケート調査」（以下「在学生アンケート」と表記）を行っている。このアンケート調査は、在学生が本学の教育内容や学生生活についてどのような意識を持っているのか、また本学学生の学習実態などを明らかにすることで、今後の教育改善に活かすことを目的としている。本報告書では、主な項目の分析結果を中心に報告する。なお、回答人数が少なくかつ旧課程の専攻である史学専攻（2名）、言語科学専攻（1名）は、分析の対象から除いた。

調査概要は以下の通りである。

目的：東京女子大学に通っている学生の学習及び大学生活に関する意識・実態調査

方法：Web調査

対象：東京女子大学に在籍している2～4年次学生、2756名（5月1日時点、休学者は含む）

（うち：2年次学生 879名、3年次学生 945名、4年次学生 932名）

調査期間：2022年4月14日～2022年6月10日

有効回答数：2246名

（うち：2年次学生 766名、3年次学生 788名、4年次学生 692名）

有効回答回収率：81.5%

（うち：2年次学生 87.1%、3年次学生 83.4%、4年次学生 74.2%）

調査項目：2021年度までに実施してきた調査結果を踏まえ、「学習」、「学生生活」、「図書館」、「課外・学外の活動」、「その他」などの項目で構成している。

本報告書では、2年次、3年次、4年次などの表記が出てくるが、在学生アンケートは、年度初めに実施しているため、例えば、2年次の授業に対する満足度は、当該学生が1年次であった時の授業の満足度を示す。同様に、3年次の授業に対する満足度は当該学生が2年次であった時の授業の満足度、4年次の授業に対する満足度は当該学生が3年次であった時の授業の満足度のことである。

また、本報告書で用いるデータは全数調査によるものなので有意確率（p値）は報告せず、平均値・標準偏差および効果量（ $\eta^2$ ）のみを報告する。なお、 $\eta^2$ については、Cohen(1988)の基準 $\eta^2 = .01$  (small)、 $\eta^2 = .06$  (medium)、 $\eta^2 = .14$  (large) を用いた。

なお、参考のため過去5年間の回収率（2～4年次学生全体）を表1に示しておく。

表1 年度別に見た2～4年次アンケートの回収率

2017年度	2018年度	2019年度	2020年度 (Web調査)	2021年度	2022年度 (Web調査)
83.2%	84.3%	84.9%	70.0%	82.8%	81.5%

(1) 授業に対する満足度について

「授業全般」、「全学共通カリキュラムの科目の授業」、「学科科目（専門）の授業」の3つのカテゴリー別に、過去1年間の学修を通じての授業の満足度を尋ねたところ、表2のような結果となった。「大変満足している」、「満足している」、「どちらかと言えば満足している」の3つを合計した割合が全てで8割を超えていることから、授業に対する満足度は全般的に高いと言える。昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響とみられる満足度の低下が起こったが、今年度においては、例年の数値には届かないものの回復した。対面授業が増加したことで本来期待していた形式での授業が受けられたため、また、オンライン授業に教員・学生共に習熟したため、満足度が高くなったと考えられる。

表2 授業に対する満足度

	全く満足 していない	満足 していない	どちらかと 言えば満足 していない	どちらかと 言えば満足 している	満足 している	大変満足 している	履修 していない
	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)	% (n)
授業全般	0.9 (20)	2.4 (52)	11.4 (248)	38.4 (835)	39.7 (863)	7.1 (154)	
全学共通 カリキュラムの 科目の授業	0.7 (16)	2.8 (61)	9.2 (200)	35.4 (769)	39.3 (853)	10.9 (237)	1.7 (36)
学科科目 (専門)の授業	0.6 (14)	2.3 (50)	7.8 (170)	28.3 (614)	42.4 (921)	17.5 (381)	1.0 (22)

注：各項目について欠損値（71人）を除いて集計した結果である。

授業に対する満足度を専攻別、学年別に比較するため、まず「大変満足している」=6、「満足している」=5、「どちらかと言えば満足している」=4、「どちらかといえば満足していない」=3、「満足していない」=2、「全く満足していない」=1と点数化し、それぞれの項目の平均値および標準偏差を算出した（表3～表8）。

表3～表5は、専攻別に見た、授業に対する満足度に関する6項目の平均値および標準偏差を示している。全ての項目かつ専攻で、授業満足度の平均値が4.0以上となった。効果量を見ると、「授業全般」と「全学共通カリキュラムの科目の授業」では効果量は小さく、専攻による大きな違いは見られない。相対的に効果量の大きい「学科科目（専門）の授業」でも、効果量は小さく（ $\eta^2 = .040$ ）なった。

表 3 専攻別に見た「授業全般」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.25	1.053	354	$\eta^2 = .023$
哲学	4.76	0.993	93	
日本文学	4.48	0.875	226	
歴史文化	4.34	0.906	209	
国際関係	4.27	0.965	246	
経済学	4.23	0.807	174	
社会学	4.38	0.822	120	
コミュニティ構想	4.31	0.905	137	
心理学	4.56	0.845	194	
コミュニケーション	4.21	0.893	243	
数学	4.46	0.818	87	
情報理学	4.29	0.829	89	
合計	4.35	0.923	2172	

表 4 専攻別に見た「全学共通カリキュラムの科目の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.43	1.087	354	$\eta^2 = .016$
哲学	4.90	1.171	93	
日本文学	4.60	0.976	226	
歴史文化	4.43	1.041	209	
国際関係	4.45	0.979	246	
経済学	4.36	0.992	174	
社会学	4.63	0.869	120	
コミュニティ構想	4.53	1.051	137	
心理学	4.53	0.967	194	
コミュニケーション	4.35	0.944	243	
数学	4.68	0.842	87	
情報理学	4.38	0.898	89	
合計	4.49	1.005	2172	

表5 専攻別に見た「学科科目（専門）の授業」に対する満足度

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.47	1.104	354	$\eta^2 = .040$
哲学	5.06	1.131	93	
日本文学	4.77	0.966	226	
歴史文化	4.73	0.973	209	
国際関係	4.61	0.949	246	
経済学	4.49	0.923	174	
社会学	4.73	0.925	120	
コミュニティ構想	4.71	0.986	137	
心理学	5.10	0.897	194	
コミュニケーション	4.57	0.986	243	
数学	4.47	0.860	87	
情報理学	4.35	1.001	89	
合計	4.66	1.004	2172	

表6～表8は、学年別に見た授業に対する満足度の平均値および標準偏差である。授業満足度に関する全ての項目において、4年次生の満足度が最も高くなった。しかし、効果量を見ても分かるように、学年間に大きな違いは見られない。

表6 学年別に見た「授業全般」に対する満足度

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.36	0.883	744	$\eta^2 = .023$
3年次	4.18	0.946	753	
4年次	4.52	0.907	675	
合計	4.35	0.923	2172	

表7 学年別に見た「全学共通カリキュラムの科目の授業」に対する満足度

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.46	0.959	744	$\eta^2 = .024$
3年次	4.33	1.039	753	
4年次	4.71	0.978	675	
合計	4.49	1.005	2172	

表8 学年別に見た「学科科目（専門）の授業」に対する満足度

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.58	0.980	744	$\eta^2 = .022$
3年次	4.54	1.054	753	
4年次	4.88	0.938	675	
合計	4.66	1.004	2172	

次の図1～図3では、授業満足度について、学年別および学科別の違いを同時に示しておく。「授業全般」では、4年次、2年次、3年次の順で満足度が高い傾向があり、「全学共通カリキュラムの科目の授業」、「学科科目（専門）の授業」では、特に国際社会学科において年次と満足度が比例する傾向が見受けられた。

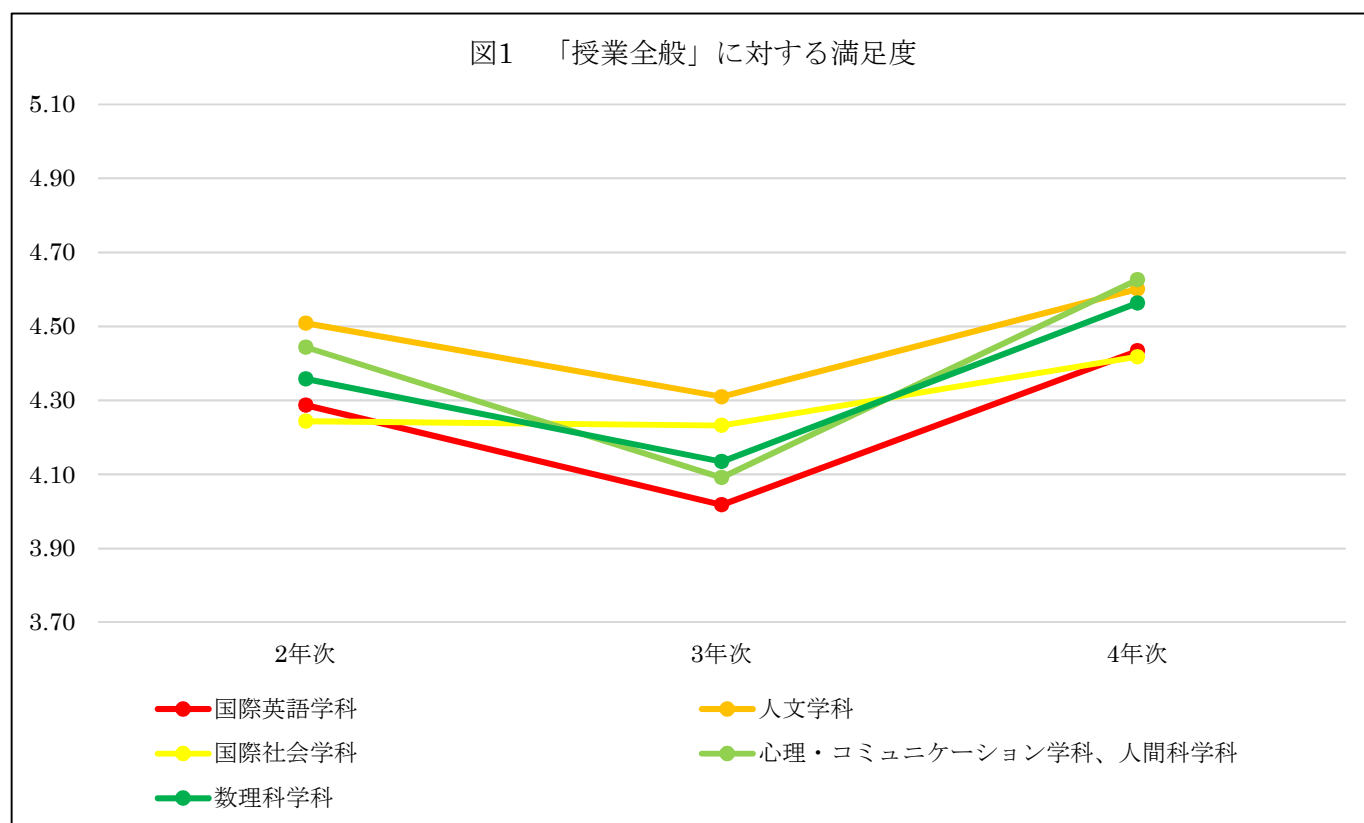


図2 「全学共通カリキュラムの科目の授業」に対する満足度

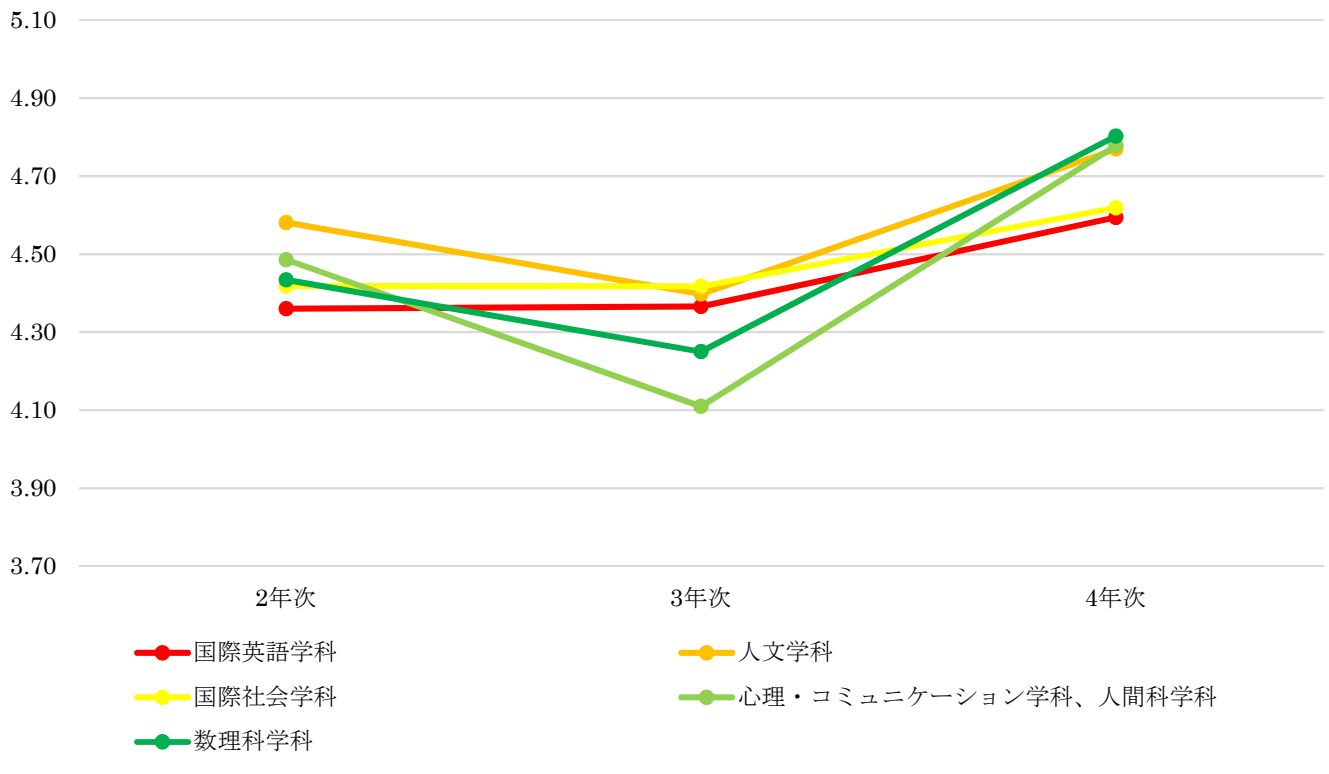
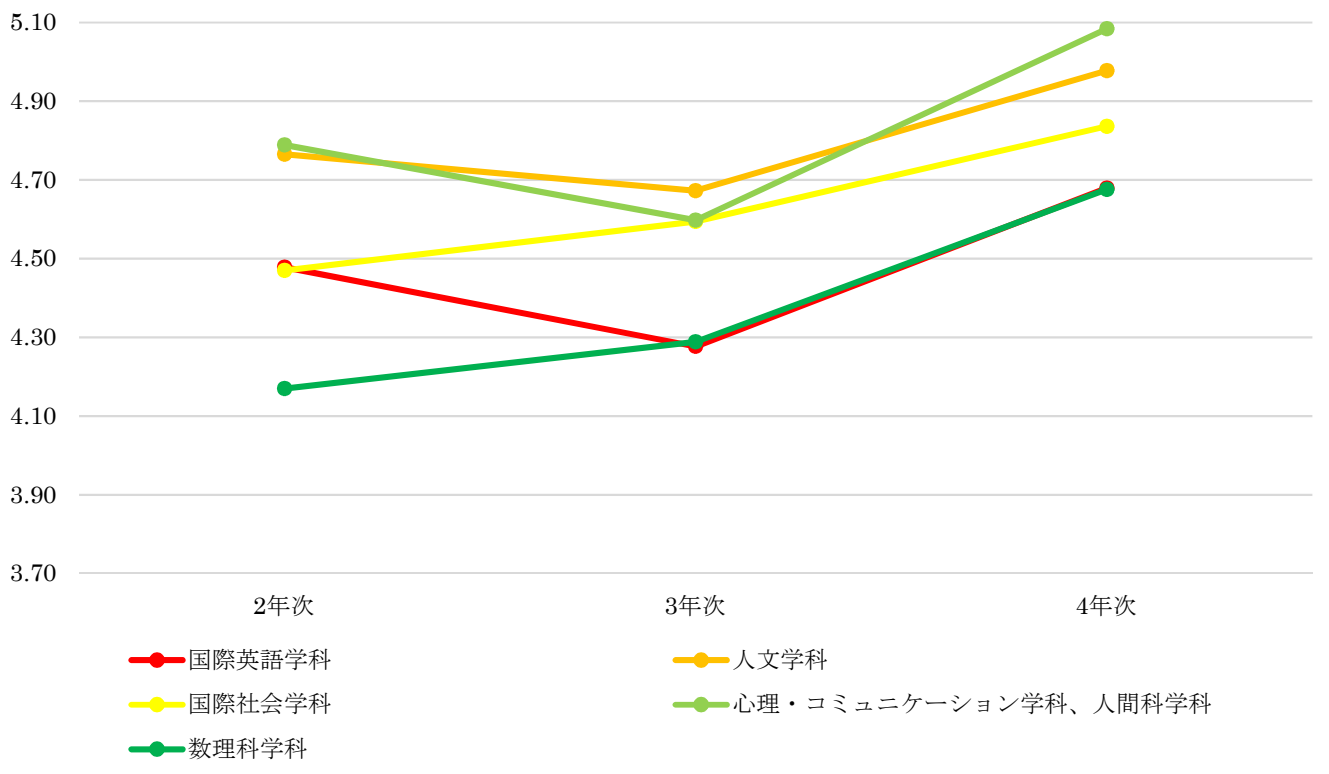


図3 「学科科目（専門）の授業」に対する満足度



(2) 身についたスキルに関する項目の集計・分析結果

「昨年1年間の学びを通じてどのようなスキルを身につけることが出来たと思うか」を調べるため、「学術的な文献の読解力」、「人の話を聞いて、要点をつかむ力」、「プレゼンテーションにおいて、効果的に話をする力」、「ディスカッションにおいて、論理的に意見を述べる力」、「論理的でわかりやすい文章を書く力」、「わかりやすいプレゼンテーション資料を作成する力」、「パソコンで図表を作成する力」、「課題に応じて、適切な資料を収集する力」、「相手や場面に応じたコミュニケーション力」、「グラフや表で示された統計資料を理解する力」の10項目について、「全くそう思わない」(=1)から「非常にそう思う」(=6)の6件法で尋ねた。

その結果が図4である。「人の話を聞いて、要点をつかむ力」、「課題に応じて、適切な資料を収集する力」、「相手や場面に応じたコミュニケーション力」の3項目は、「非常にそう思う」「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」の肯定的な回答が8割を超えている。その他の項目でも、肯定的な回答が6割を超えており、多くの学生がこれらのスキルを身につけることができたと考えている事が分かった。

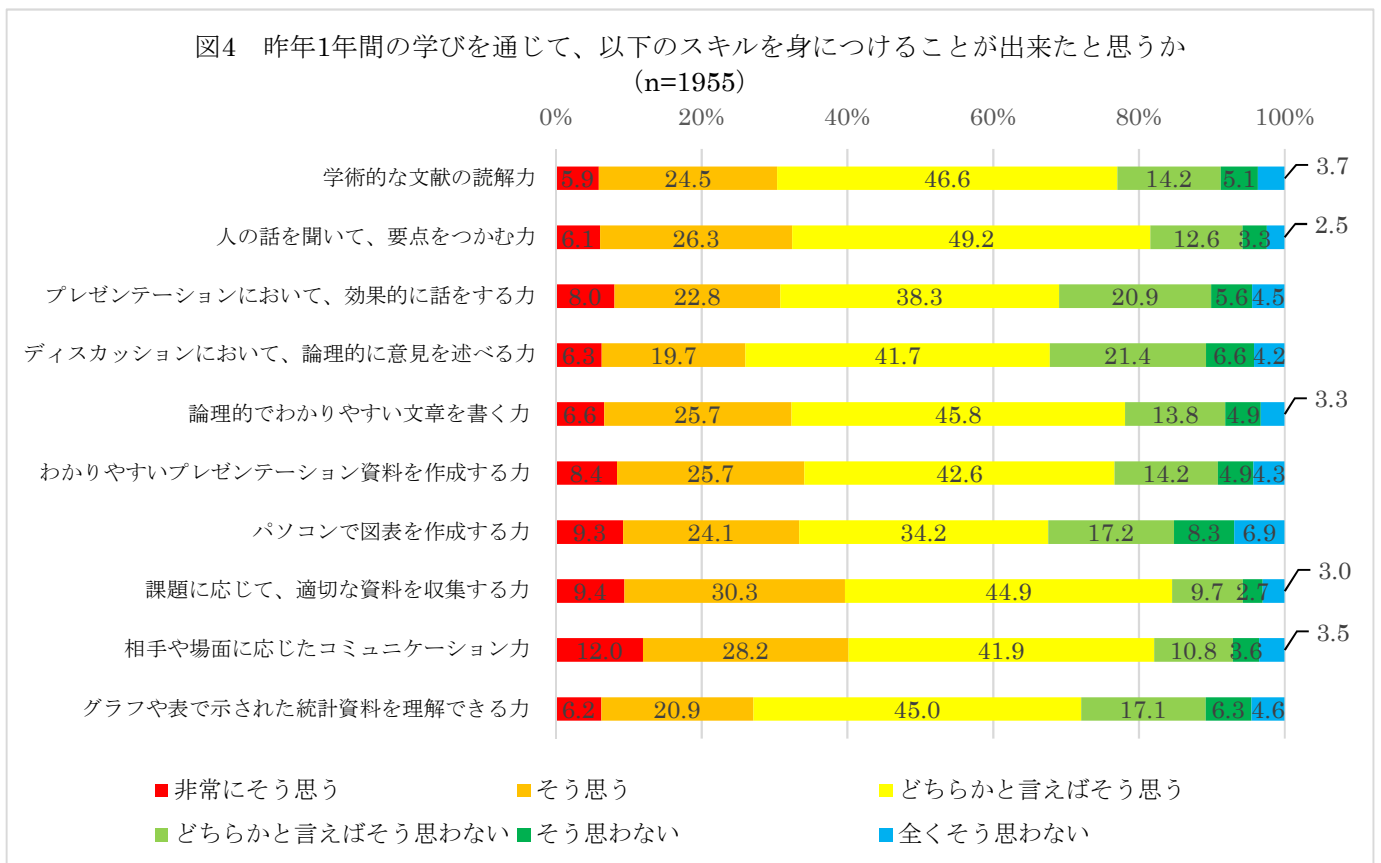


図4に示す10項目について、得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し、「スキル総合得点」(M=4.03, SD=0.849, 最大=6, 最小=1; 因子分析で一次元性も確認。α=.917)として、以降の分析に使用した。

専攻別にスキル総合得点を見ると（表 9）、平均値が最も高い専攻でM=4.25、最も低い専攻でM=3.80 となった。効果量は小さく ( $\eta^2 = .017$ )、専攻間におけるスキル総合得点の違いは大きくはない。昨年度は平均が3点台の専攻が大半であったが、今年度は過半数以下になっており、スキル向上を実感している学生が増えている。

表 9 専攻別に見た「スキル総合得点」

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.00	0.925	317	$\eta^2 = .017$
哲学	4.04	0.827	80	
日本文学	4.04	0.845	211	
歴史文化	3.94	0.867	181	
国際関係	4.07	0.789	219	
経済学	3.90	0.812	159	
社会学	4.25	0.804	107	
コミュニティ構想	4.19	0.815	128	
心理学	4.20	0.726	172	
コミュニケーション	3.97	0.858	212	
数学	3.80	0.865	83	
情報理学	3.94	0.948	86	
合計	4.03	0.849	1955	

スキル総合得点を学年別に見ると、表 10 の結果となった。学年別では、4年次のスキル総合得点が他学年より高い。効果量は小さく ( $\eta^2 = .019$ )、学年間におけるスキル総合得点の違いは大きくない。

表 10 学年別に見た「スキル総合得点」

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.02	0.797	647	$\eta^2 = .019$
3年次	3.90	0.862	683	
4年次	4.18	0.863	625	
合計	4.03	0.849	1955	



### (3) 身についた能力に関する項目の集計・分析結果

昨年1年間の学びを通じて、以下の図5に示される14項目の能力を身につけることが出来たと思うかどうかを尋ねた結果を示す。ほとんどの項目で肯定的な意見が7割を超える結果となった。「率先してグループをまとめリードする力」の肯定的な意見は他と比べて低くなっているため、グループワークの機会や課外活動への参加を推奨する等の方策を検討する必要がある。また、「数字やデータに基づいて物事を考える力」も低くなっているのだが、2022年度からデータサイエンス副専攻を開始したため、効果を期待したい。

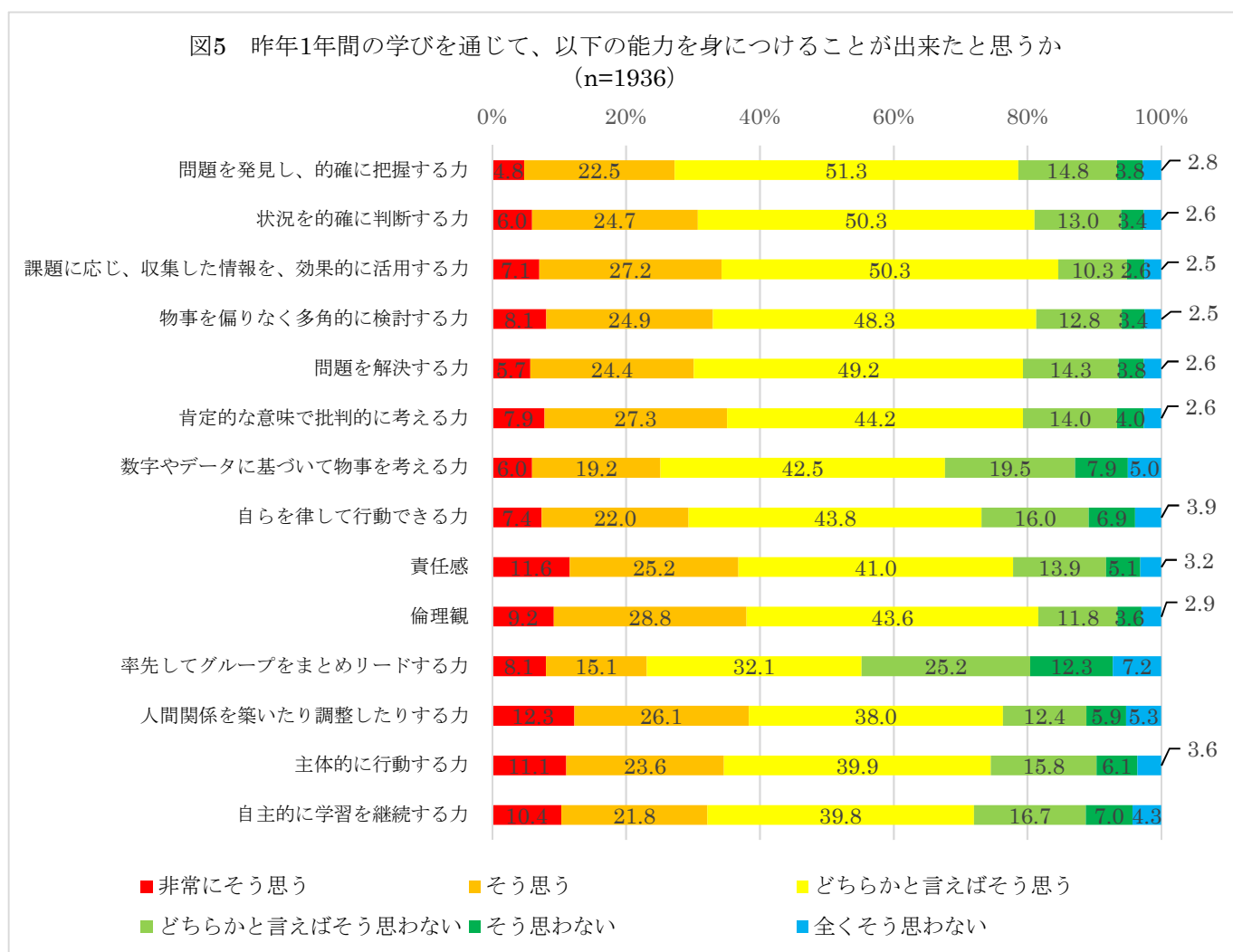


図5に示す14項目についても、得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し、「能力総合得点」(M=4.03、SD=0.842、最大=6、最小=1、因子分析で次元性も確認。α=.943)として以降の分析で用いた。

能力総合得点を専攻別に見ると（表 11）、最も高い専攻でM=4.30、最も低い専攻でM=3.90であった。しかし、効果量は小さく（ $\eta^2 = .013$ ）、専攻間の差はさほど大きくない。

能力総合得点を学年別で見た場合（表 12）、4年次、1年次、2年次の順で能力総合得点が高くなっている。効果量は、専攻別と比べると大きいものの、小さく（ $\eta^2 = .038$ ）なった。

表 11 専攻別に見た「能力総合得点」

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.00	0.944	315	$\eta^2 = .013$
哲学	4.15	0.852	80	
日本文学	4.01	0.831	208	
歴史文化	4.00	0.868	178	
国際関係	4.10	0.757	216	
経済学	3.90	0.847	159	
社会学	4.30	0.739	107	
コミュニティ構想	4.16	0.778	128	
心理学	4.07	0.762	169	
コミュニケーション	3.94	0.809	208	
数学	4.02	0.920	83	
情報理学	3.92	0.891	85	
合計	4.03	0.842	1936	

表 12 学年別に見た「能力総合得点」

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	3.98	0.778	641	$\eta^2 = .038$
3年次	3.88	0.866	675	
4年次	4.27	0.831	620	
合計	4.03	0.842	1936	

(4) 身についた技術に関する項目の集計・分析結果

図6は、昨年1年間の学びを通じて身につけることができたと思う技術13項目の分析結果である。半数以上の項目で、肯定的な回答の割合が8割を超えた。しかし、特に「授業の要点を整理してノートにまとめる技術」、「特定のテーマに関する文献や資料を図書館で探す技術」では、割合が低くなった。「特定のテーマに関する文献や資料を図書館で探す技術」は、年度と同様、新型コロナウイルス感染症拡大により、大学の図書館の使用が制限されていたことが一因と思われる。制限の緩和により、昨年度は5割に満たなかった割合が7割近くに回復していることから、同様に推測される。

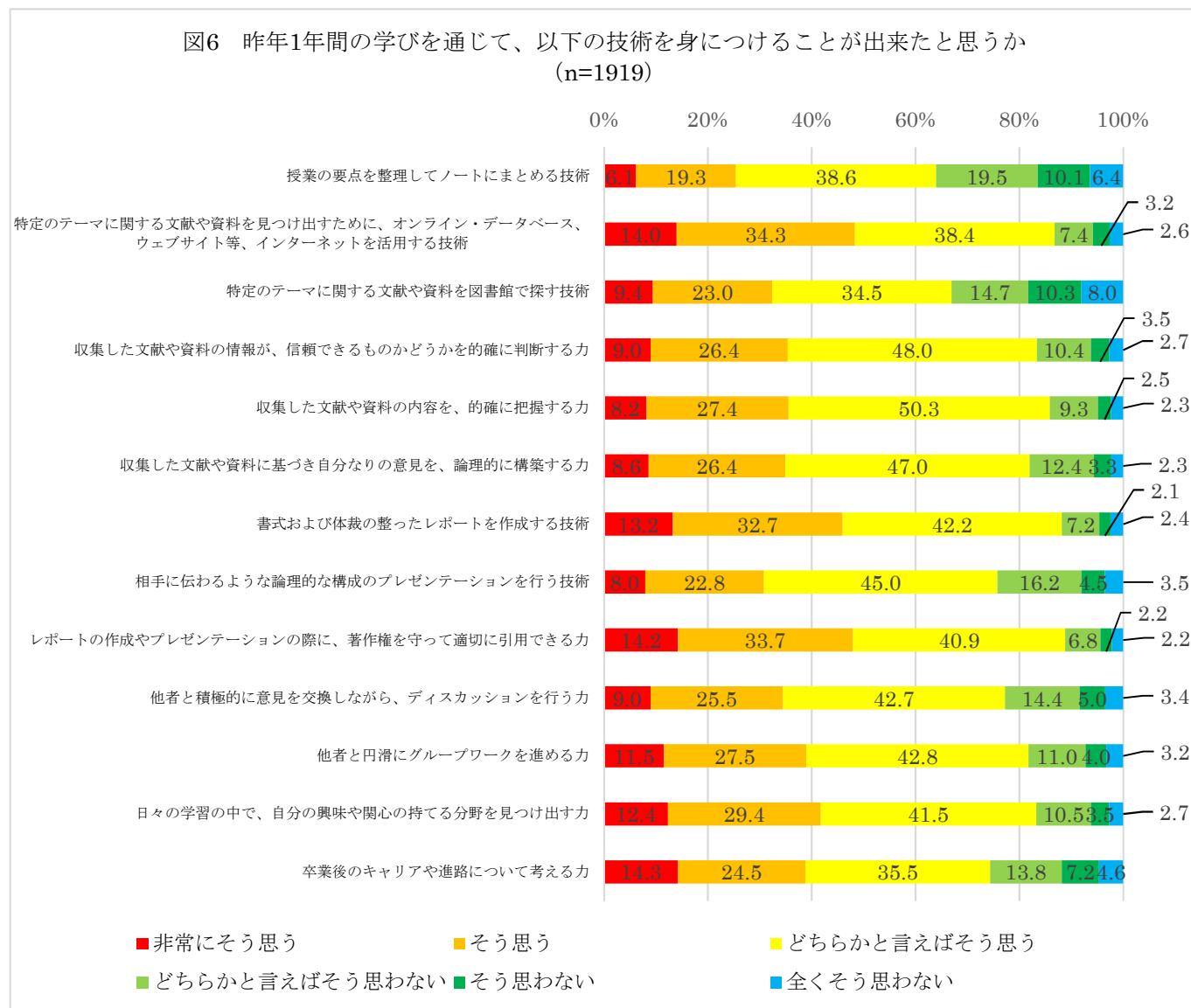


図6に示す13項目についても、得点を合計しそれを項目数で割った項目平均を算出し、「能力総合得点」(M=4.16、SD=0.826、最大=6、最小=1、因子分析で次元性も確認。α=.930)として以降の分析で用いた。

技術総合得点を専攻別に見ると（表 13）、最も高い専攻でM=4.37、最も低い専攻でM=4.00であった。効果量は小さく（ $\eta^2 = .011$ ）、専攻間の差はさほど大きくないことがわかる。

技術総合得点を学年別で見た場合（表 14）、4年次、1年次、2年次の順で能力総合得点が高くなっている。効果量は、専攻別と比べると大きいものの、小さく（ $\eta^2 = .033$ ）なった。

表 13 専攻別に見た「技術総合得点」

専攻	平均値	標準偏差	人数	効果量
国際英語	4.10	0.915	313	$\eta^2 = .014$
哲学	4.23	0.810	79	
日本文学	4.22	0.824	205	
歴史文化	4.15	0.860	178	
国際関係	4.25	0.753	214	
経済学	4.05	0.801	157	
社会学	4.37	0.756	107	
コミュニティ構想	4.29	0.729	126	
心理学	4.23	0.756	167	
コミュニケーション	4.09	0.797	205	
数学	4.01	0.906	83	
情報理学	4.00	0.903	85	
合計	4.16	0.826	1919	

表 14 学年別に見た「技術総合得点」

学年	平均値	標準偏差	人数	効果量
2年次	4.12	0.753	633	$\eta^2 = .033$
3年次	4.01	0.873	669	
4年次	4.37	0.804	617	
合計	4.16	0.826	1919	